

佐伯市戦後五十年史(四)

敗戦後の諸改革

矢野 彌生

(会員 佐伯市中山区)

〈前号〉

三 農地改革

(一) 第一次農地改革 (二) 第二次農地改革

四 戦後教育の新しい出発

(一) 新学制の発足

教育使節団と 〈アメリカ教育使節団の勧告〉 日本国教育基本法 憲法施行(昭和二十二年五月三日)よりも一足さきに、四月一日の新学期から新しい教育・学校制度がはじまった。

もつとも教室がなかったり、教科書がそろわなかったり、実際の発足にはさまざまな障害があつて混乱したが、ともかく教育基本法と学校教育法が施行されたこと

は、わが国の教育史上画期的なことであった。

G H Q(連合軍総指令部)も最初から教育改革に大きな関心を示していた。昭和二十年(一九四五)十月から軍国主義教員の追放、教育の自由主義化・修身・歴史・地理の授業の停止などをやつぎばやに指令し、ついで、新しい教育をつくるために、アメリカ本国から教育使節団を招いた。日本側はG H Qの指示によって、これに協力するため、日本教育家委員会を準備した。

昭和二十一年三月五日来日したアメリカ教育使節団は、同月三十日には報告書を提出するというスピーディーな仕事ぶりを示している。報告書は、文部省による教育の中央集権的支配の廃止・地域住民の参加する教育行政機関の設立・義務教育九年制・男女共学・国定教科書制度の廃止・服従心養成を中心とする方法をやめて、生徒の個性と独立した思考を發展させ、民主的国民としての権利と責任を助長すること、などを勧告した。この勧告が示した方向はたしかに進歩的なものであった。

〈新しい教育の基本理念を示した教育基本法〉 アメリカ教育使節団の勧告の線にそつて、新しい教育の基本理念を示す教育基本法、学校制度を統一的に規定した学校

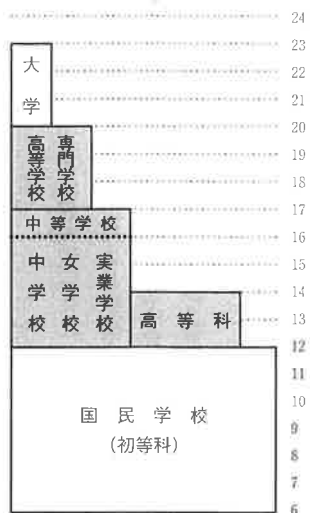
基本法、教育制度の自治的運営のための教育委員会法などが制定された。

教育基本法は、平和な国家や社会をつくる自主的精神に満ちた国民を育成することが、教育の目的だと規定した。それは忠孝を軸にして、服従心を養成しようとした明治憲法下の教育とは、まったく異なる原理の上に立っていた。衆参両院も昭和二十三年六月十九日「教育勅語」の失効を決議している⁽¹⁵⁾。

六・三制
 〈戦前の学校制度〉 教育基本法はまた、性別・身分・経済的地位による差別を禁じ、教育の機会均等の実現を強調した。学校教育法が学校の種類による差別をなくして、学校制度の一元化をはかったのも、この考え方にもとづいていた。

戦前の学校制度では、義務教育が終わると、中学校から大学にいたる系列と、実業学校など職業教育の系列とが二つに分かれていて、別々の学校体系がつけられていた。そして職業教育の学校はいつもいちだん低く格づけられており、そのどちらを選ぶかでその人の将来の地位が決まってしまうようなくみになっていた(第5図参照)。

(年齢)



第5図 戦前の学校制度
 (児玉幸多・久野健著『日本史図録4』による)

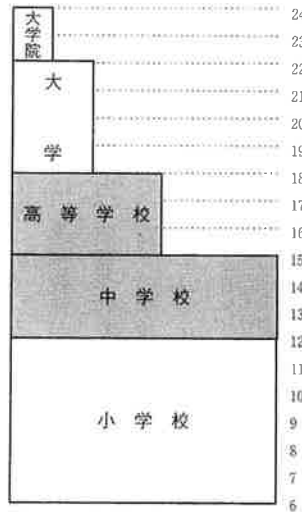
〈義務教育九年間に伸びる〉 学校教育法によって、これまで各種の学校を規定していた個々別々の法令は廃止

され、この法律一本になった。学校制度は小学校六年と中学校三年を義務教育とし(六・三制)、そのうえに三年の高等学校(後期中等教育)と四年の大学(高等教育)をおき、このほか別に二年の短期大学を認める、という形に整備された(第6図参照)。

教育方法の面でも、生徒の自主性をひき出し、個性をのびすことが目的とされた。

教科では修身科がなくなつて社会科が生まれたことは注目される。すなわち、これまでの歴史・地理・公民科

(年齢)



第6図 戦後の学校制度
(児玉幸多・久野健著「日本史図録4」による)

などを統一し、地域や社会の身近で具体的な問題から歴史・地理・社会のあり方などを理解させようというのが、新しい社会科学の目的であった。教師たちも、新しい教育の理論や方法を学んだり工夫したりした。教室も教材も不足がちな悪条件の下で、新しい教育は着実に前進していった。

大分県下の〈授業の再開〉 大分県下の多くの学校

六・三制 は、敗戦直後の昭和二十年九月一日から二学期の授業を開始した。しかし、戦災を受けた学校や、昭和十八年の大水害による校舎の復旧が思うにまかせなかつた学校などは、二部制授業を余儀なくさせられた

り、校舎の復旧作業に時間をあてたところもあった。

また、都市部では、深刻な食糧難に対処して、「食糧増産」を授業の一部に取り入れたところもあった(『大分県教育百年史』第二巻)。

〈新制中学校の開校〉 新たに義務教育となった中学校は校舎が不足し、その確保は急務であった。

当時の県下の状況を見ると、昭和二十二年九月現在、新制中学校二五五校について調査した結果によると、現在使用中の教室数は一五四七(仮教室一〇〇九を含む)であるが、二十三年四月現在必要とする教室数(特別教室含む)は二八二四教室となるので、約一一〇〇教室が不足している。

しかも、市町村費で二十二年中に建築が計画されているのは、わずか一六九教室にとどまっており、大多数の県下の中学校は寄付により建築をすすめようとしている(募集中一三二校、募集計画中六八校)。その募集総額は三〇四三万円の巨額にのぼっている(『大分県教組二十年史』)。

また、初年度における県下の中学生は五万五五二九人であったが、教科書の配給はまったくの混乱状態で、六

月になつても未着のものが多かつた。中学校問題で上京していた佐藤県教学課長の帰来談では、六月二十日ごろ文法と数学・化学の教科書がくる予定で、二十五日ごろ国語、月末に英語と農業の教科書が届くであろうといつた状態であつた。

しかし、全教科の教科書が満配されたのはその学年が終わらうとする三学期の末であつた。このように新制中学校は発足当時まことに惨めな状態であつた(『大分県教育百年史』第二巻)。

新聞報道では、そのような状況を生んだ原因について次のように伝えている。

初級中学をみじめにした責任は、まったく準備を怠つた点にある。第一は県当局の責任問題である。いつたい初級中学がどのような姿をもつて発足するかを想定しなかつたわけではあるまい。

すくなくとも教科書不足に備えて一般的な授業対策をはじめから確立しておくべきであつた。

第二は教員組合の責任問題である。教育の民主化を叫んで組合の結成が行われたことは周知の事実であるが、それに対してどれほどの努力が重ねられて

いるであらうか。俸給値上げに対して積極的な努力と、各種選挙(県議選や国会議員選挙の意味か)において結束し、いわゆる教育議員を若干送り出したことは認められるが、それ以外に本質的な教育活動は見るべきものがなかつたことは、否めない事実といわなければならぬであらう(『大分合同新聞』昭和二十二年六月八日版)。

(二) 佐伯市の六・三制

佐伯東小の〈市立小学校の設置と廃止の状況〉

新教育と苦惱 六・三制は昭和二十二年より発足したのであつたが、当時は小学校は佐伯・佐伯東・鶴岡・八幡・上堅田・西上浦・大入島の七校である。

その後、小学校では昭和二十八年五月に灘小学校が佐伯小学校分校より独立し、昭和三十年より下堅田小・青山小・木立小の三校が町村合併により南海部郡より佐伯市に編入された。さらに昭和三十二年には大入島小の石間・荒網代両分校の廃止によって大入島南小学校が独立した。

当時の小学校の学級数・児童数をみると、第12表のと

第12表 佐伯市の小・中学校の状況

(1) 市立小・中・幼稚園

	小学校			中学校			幼稚園		
	24年度	25年度	26年度	24年度	25年度	26年度	24年度	25年度	26年度
学級数	116	114	114		51	45		10	10
児童生徒数	5,246	5,326	5,452		2,416	2,304		487	391
教員数		143	143		80	74		10	10

(『市勢要覧』昭和27年による)

(2) 市立小学校 (昭和26年)

種別 学校名	学級数	児童生徒数			教員数			分教場の数
		男	女	計	男	女	計	
佐伯小学校	28	739	736	1,475	20	14	34	1
佐伯東小学校	21	539	552	1,091	17	9	26	
鶴岡小学校	15	351	335	686	12	6	18	
上堅田小学校	8	209	190	399	9	4	13	
八幡小学校	17	409	414	823	15	6	21	
大入島小学校	4	282	304	586	11	7	18	
西上浦小学校	11	210	182	392	6	6	13	
計		2,739	2,713	5,452	91	52	143	

(『市勢要覧』昭和27年による)

おりである。この表で分かることは、①児童数が昭和二十四年から二十五年にかけて八十人、二十五年から二十六年にかけて一二六人と急増していること、②一学級の平均児童数が昭和二十四年四五・二人、二十五年四六・七人、二十六年四七・八人と多いこと、③昭和二十五年から二十六年にかけて、教員数・学級数は増加していないのに、児童数は一二六人も急増していること、などが目立つ。これは、敗戦直後の復員・引き揚げ・帰郷などによる人口の急増が主因である。

〈東小校舎の全焼と借校舎での授業〉 敗戦の影響がまだ強く残っていた昭和二十二年一月、佐伯東小学校の校舎が全焼し、子供たちは借校舎での授業を余儀なくされた。

当時、病院以外は夜は送電されてなく、おみそかの終夜送電が原因で、電気コンロの過熱から火事になり、本館から体育館へ、二〜三時間で燃えてしまった。残ったのは幼稚園と倉庫だけだった。また、一番困ったのは子供達で、四ヶ所に別れた分散授業だった。佐伯小学校の間借生活だったので、学校では佐伯小の生徒と対立しないように心配していたという。

同校卒業生の吉田直道は、「東小の思い出」として次のように述べている。

昭和二十二年一月一日(当時一年生)の早朝、父親から東小學校が火災により校舎全焼と聞かされ、友達数人と急いで學校まで走った。學校に近づくと煙の臭い、そして無残にも県下屈指の校舎が後形もなく焼失していた。

昭和二十一年四月入学時に、三人の姉兄から東小の建物・先生・生徒の

素晴らしさを良く聞かされていた。

先ず驚いたのは、綺麗に磨かれた廊下、鏡のように光り、走ればすべり転げる位だった。ですから、活発な今の生徒のように廊下を飛び走っているような記憶はない。



開校当時(昭和10年)の佐伯東小學校
(講堂と朝会風景)

いよいよ一年生の三学期から、佐伯小學校の借校舎(山手区の以前法務局前の幼稚園)での授業が始まった。教室はオンボロで冬は大変寒く、東小の校舎と比べたら雲泥の差であった。特に僕の家は葛区の一審端だったので、通学路は東小一番に遠く、學校近くに住む者が大変羨ましく思った。

授業が始まり、当初は借校舎のため緊張していたが、だんだん馴れて佐伯小學校の方へ遠征するようになった。始めは悪口の言い合いから、いよいよ本格的な喧嘩となり、以後毎日毎日戦いとなった。特に下校時には、佐伯小の同学年、上級生までが待ち伏せしていて、打たれたり、打ち返したりした。

遊び方も殆ど毎日のように城山へ登り、チャンバラ・陣取りの繰返しで遊んだ。ある時は、昼休み給食を早く食べベクラスの男子全員で城山に登り、夕方になって教室へ戻ると先生が待つており、全員が大変叱られた事が、今でも思い出される。

六年生でやっと自分達の學校に戻る事ができ、その嬉しさは今でも良く覚えている。卒業式も講堂がようやくやぐ間に合い、新築の講堂で卒業できたのが印象深い。

今、四十年前を振り返って見ると、もし火災がなかったら僕達の小学校校生活はずい分違っていたと思う。

しかし、火災により往復七^き、約二時間の通学路、遊びは殆んど城山、お陰で足腰は鍛えられ、不自由さも十分教えられ、それが今日自分に役立つています。

僕の小学校時代の思い出としては、やはり一年生の時の校舎の火災、城山での遊びが忘れられない(『開校五十年記念誌』)。

佐伯東小学校の校舎の再建は、戦後のことで、製材所に材料がなく、生材料で焼け残りの基礎の上に建て、つっぱりをしなくてはならないそまつなものであった。昭和二十四年白坪側校舎、同二十六年本館と四年かかって完成している。

新制中学校 〈中学校の設置の経過〉 昭和二十二年四月の発足 月に六・三制が発足した。当時新制中学校は鶴谷・鶴岡・彦陽・大入島の四校であった。しかし、彦陽中学校が発足後一年を経過したのみで分離して、八幡中・西上浦中の二校となった。しばらく続いたが、市教委の熱心な斡旋^{あせど}によって両地区の意思がまとまり、昭和二十八年度より合併し、彦陽中学校の元の校名にか

えて再出發した。

昭和二十七年九月よりは、鶴岡中が学区に上堅田の一部を加え、校名を城南中学校と改称して現在地において発足した。また、昭和三十年(一九五五)度より町村合併により堅田中・木立中の二校が市に加わった。さらに、昭和四十八年(一九七三)度には木立中が城南中に実質統合され、校舎は取り壊された(『佐伯市史』)。

〈新制中学校発足当時の苦しかった教育実践〉 鶴谷中学校は、はじめ佐伯小学校・青年学校・中学校・女学校の四か所に分散して収容したが、昭和二十三年になって、旧海軍航空隊の庁舎跡を改装してそこへ移転している。

また、鶴岡・彦陽・大入島の各中学校では、小学校舎の間借りまたは市役所出張所の一部使用ということ、急場をしのぐ状態であった。運動場についてももちろん独立したものを持った新制中学校は一つもなかったし、施設や校具などほとんど皆無に等しかった(『佐伯市史』)。

昭和二十六年当時の佐伯市の中学校の状況を示すと、第13表のとおりである。この表を見てわかるように、当

時の佐伯市の中学校では、一学級の平均生徒数は鶴谷中五四・三人、八幡中四八人、大入島中四二・八人、西上浦中四十・六人と著しく多いことが分かる。なかでも、当時、旧海軍航空隊の庁舎に移転していた鶴谷中学校ではとくに多かった。

当時、鶴谷中学校の教師であった江藤孝雄は、学校の施設・設備の状況や授業風景など学校生活の一端を、『鶴谷回顧¹⁸』の中で、次のように述べている。

昭和二十三年四月、講堂のステージいっぱいには並んだ

第13表 佐伯市の中学校（昭和26年）

種別 学校名	学級数	児童生徒数			教員数		
		男	女	計	男	女	計
鶴谷中学校	20	564	570	1,134	23	6	30
鶴岡中学校	6	163	163	326	8	3	11
八幡中学校	8	209	175	384	11	2	13
大入島中学校	6	120	137	257	9	2	11
西上浦中学校	5	98	105	203	7	2	9
計	45	1,154	1,150	2,304	58	15	74

（『市勢要覧』昭和27年による）

沢山の先生方と一緒に新任式があった。皆粗末な服装だった。一年目のHRは講堂のある建物の最北端の一階で、窓ガラスはほとんどなかった。

まだ、食糧事情が悪く、昼食はどこで食べてもよかつた。天気の良い時は海岸に出て生徒と共に食べたりした。現在とは違って、海が大へんきれいだった。底の砂粒さえ見え、熱帯魚のような美しい魚も時には見られた。

運動場の半分は芋畑で、周辺は爆弾の穴で起伏していた。東側に広がる飛行場のあとには建物など全く無く、一面の原っぱで、春は



鶴谷中学校の校舎になった旧海軍航空隊跡
（昭和22年4月～29年3月まで）

緑に、秋は黄色に変化し、四国まで見渡せる青い海と共に、その単調な美しさは一年中眺めても飽きることはなかった。

次にもらったHRは、本校舎の北の端の一階だったが、四階屋上から一階床下に至るまで爆弾の貫通した大穴があつて空が見えた。校舎の南側二階には数人の先生方の家族も住んでおられたし、若い先生達も幾人か泊りこんで住宅事情も悪い時代だった。が、若者の学校という感じで楽しかった。



英語クラブ活動・昭和26年5月22日(一台の蓄音機をかこんでヒアリングの最中、黒板はボロボロ割れて字は書けない)

新教育にそつた教室を作ることになってコンクリートの厚い壁を崩す作業が行われた。壁の両側にむしろを下げ、ダイナマイトを爆発させた。その間、授業は講堂のある建物で行われたが、クラスの間の壁があるわけではなく、一年全体が見渡せる授業風景は、ちよつと見ものであつた。

その後、二年続きで県の実験学校に指定され、ツルヤメソッドという研究誌作りに参加したり、研究授業を行つたりしたが、若かつたせい、あまり苦にならず、むしろ楽しかつた(中略)。

当時の授業は今に比べると実にのんびりした面もあつた。或る日教室に行くと、女子は全員いるのに、男子は一人もいない。もうすぐ鐘が鳴るのにと思いつながら川の向こうを見ると、男子が手にガマの穂をにぎつて、一団となつて滑走路を走つて帰るところであつた。

飛行場には大型爆弾の穴がいくつもあつて、中央に水がたまり、そのまわりにガマがたくさん生えていた。生徒の良い遊び場であつた。

北九州を周つた修学旅行、高松宮杯英語スピーチへの参加、文化祭の英語劇など、先生方・生徒諸君に関する

なつかしい思い出が山ほどあって、教職三十八年間のスタートの、青春時代の誠に楽しかった、航空隊ツルヤの五年間であった。

〈移転当時の鶴谷中学校〉 鶴谷

中学校は昭和二

十九年三月には、

旧海軍航空隊の

庁舎の仮校舎から長島川(現・中川)埋立地の新校舎に移転した。北グランドはなく取付道路も不備であった(写真参照)。向こうは明神様の神社、南海病院など見えて川面にはチリメン波が立つのどかな学園であった。

しかし、肥しのおいとハエが遠慮なく予告なしに訪れた。小さいながらこれが大鶴谷中学の胎動の始まりだったと言える。校舎はジュラルミン葺きで新式だが、



鶴谷中学校の新校舎(第一期新校舎)

暑いのも他を抜いていた。話はとぶが、回避して来たボラたちが、川中に突然できた埋立に面喰い、岸に相当ぶつかったものもあるやと聞いた(『鶴谷回顧』)。

(三) 六・三制余話

とまどう 敗戦直後のことである。大分市大道国民学校新教育 に米軍が体操の授業を視察に来ることになった。大役をおおせつかったのが三浦敏夫。号令のない体操はできないと断わったが、ほかの先生もいやがつて引きうけない。しゃにむに押しつけられた。

さて、どうしたものか。号令をかけない球技をやつて、逃げる手はあるが、それではあまり芸がない。号令を少なくして、体操をやる方法はないか。あれこれチエをしぼって、タクトを思いついた。この着想がうまくいって、米軍からおほめのことばをもらった。

修身・歴史・地理など戦争中の教科書は二十一年一月、米軍命令で廃棄処分。ほかの教科書も、民主主義に逆行する箇所は、スミで消して使った。二十一年十月、国民学校に新聞紙を八つ折りにしたザラ紙の教科書が届いた。

新しい歴史の教科書”くにあゆみ“である。第一ページを開いて、先生も生徒も目をまるくした。

いままでの教科書にあった高天原(たかまがはら)や天孫降臨の話がなくなり、貝塚や古墳のことではじまっている。皇室中心の歴史はぬりかえられた。庶民の歴史が柱になり、明治維新も、国民生活との結びつきで説かれている。少年切支丹使節も、はじめて教科書に登場、歴史はがらりと装いをあらたにした。

講堂から、日露戦争で活躍した軍人、広瀬中佐の額がはずされ、校庭にあった二宮尊徳像も取り払われた。教育は百八十度の転換をしいられ、民主化教育が、かけ足で実行に移された(「激動二十年」)。

(以下次号)

【注】

(16) 『日本の歴史』第13巻

(読売新聞 昭和四十三年)

(17) 『開校五十年記念誌』

(佐伯東小学校 昭和六十二年)

(18) 『鶴谷回顧』(鶴谷中学校 昭和六十二年)

『情報提供』

来島萩山の古墳群発掘について

編集部 林 寅 喜

佐伯市教育委員会ではこのたび来島萩山の宅地造成事業に先き立ち、昨秋初めから発掘調査を進めておりましたが、十一月九日現地説明会が開催されました。これによると発掘されたのは四世紀頃のものと思われる箱型石棺三基で、人骨も副葬品等も出土せず写真のように原形を留めぬ位乱れています。

